

「相撲」から「角力」への流れの中にいて

"ちょんまげ横綱"は時期尚早だった

2024年の大相撲は、1月初場所と7月名古屋場所こそ横綱・照の富士が優勝しましたが、その他の場所では“横綱・大関の姿いずこ”という寂しい優勝戦線を示してきましたね。3月春場所には前頭・尊富士が新入幕初優勝という珍事を果たしたうえ、5月夏場所でも小結・大の里が優勝して関脇に昇進した9月秋場所でも優勝して大関に昇進しました。大の里は2023年5月夏場所が初土俵ですからなんとという昇進の速さでしょう。髪の毛の伸びが追いつかず大銀杏が結えないので、大相撲史上初とみられる“ちょんまげ大関”の誕生と呼ばれたりしていましたね。気の早いファンは、「みなぎる力」を感じさせるその取り口に魅了され、「11月九州場所も連続優勝。待つこと久しかった日本人横綱の誕生だ！」と喜んでいた方も多かったはずで

21年ぶりの大関同士相星決戦

ところが、2024年の掉尾を飾る大相撲九州場所は、予想もつかない展開になりましたね。不振の新大関・大の里に成り代わって、琴桜が大関同士の相星決戦で豊昇龍を下して初優勝して幕を閉じました。千秋楽相星決戦は2023年初場所の貴景勝 - 琴勝峰戦以来、大関同士では2003年名古屋場所の魁皇：千代大海戦以来だとのこと。そのうえ琴桜は、秋場所終了時点で4差をつけられていた大の里を覆して2024年の年間最多勝利力士の座に就いたのでしたね。なんといっても、琴桜と豊昇龍の両者は、来場所で横綱昇進に挑むことになるわけですから、多くのファンがもっていた“横綱・大関の姿今いずこ”というやるせない思いは一気にかき消されたように見えますね。

いずれもクンロク大関並みだったのに

しかし、どうして琴桜と豊昇龍が急に大関らしい相撲が取れるようになったのでしょうか。琴桜の大関昇進(2024春場所)以来先場所(同秋場所)までの4場所までの最高成績は成績は同夏場所での11勝4敗。合計39勝21敗ですから1場所平均9.8勝5.3敗で、ほとんどクンロク大関の域の成績だったんですよ。一方、豊昇龍の大関昇進(2023九州場所)以来先場所(2024秋場所)までの7場所での最高成績も2024秋場所での11勝4敗。合計66勝36敗(休場3)ですから1場所平均9.8勝5.3敗で、まったく琴桜と同じ大関らしからぬ成績だったではありませんか。

大関同士の相星決戦の陰に照ノ富士の姿が見えた

琴桜は相変わらず“乳房も豊かな”デブ体形をしていましたが、そのぜい肉の陰に、収縮することによって力を発生させる”ほんまもんの筋肉”が盛り上がってきているのが見えるような気がしました。勝ち星14勝のうち決まり手のうちの押し出し5、寄り切り2の取組では「力」を増した足腰の強さが目立っていましたし、上手投げ3、上手ひねり1の取組では今までに見たことがない腕力の強さを見せていました。一方の豊昇龍も、筋肉隆々への道を歩んでいるかの如く強烈な投げ技で相手を放り投げている姿を再三にわたって見せていましたね。「琴桜と豊昇龍は“新しい力”を身に着けている」と直感した私に、すぐに「この大関同士の相星決戦が実現したのは照ノ富士のお陰じゃないのか」と思えてきました。

筋肉トレーニングで新しい力をつけていた照ノ富士

2021年5月場所に大関に復帰した照ノ富士も、2015年に大関から陥落する以前には見られなかった“新しい力”を身に着けていました。膝の治癒に励みながら腕力や体幹の強化などのための筋肉トレーニ

グを積んでいたのです。照ノ富士は序二段にまで転落していた時には 90 キロにも及ばなかったベンチプレスが、精一杯筋トレの努力を続けた結果 250 キロ上げることができるようになっていたのです。下の表は最初の大関昇進時(2015 年)と大関復帰後の横綱昇進時(2021 年)の、ともにベスト 4 連続場所の成績を対比していたものです。明らかに”新しい力”が身についていたからこそ、ごっつくて守りも強い「自分の相撲」を確立して無敵状態で連覇して横綱に昇進していったのだと思います。

	5 月夏場所	7 月名古屋場所	9 月秋場所	11 月九州場所	合計(1 場所平均)	
2021	大関 12-3	大関 14-1	横綱 13-2	横綱 15-0	54- 6	13.5-1.5
2015	関脇 12-3	大関 11-4	大関 12-3	大関 9-6	44-16	11-0

琴桜と豊昇龍に後事を託して

私は、福岡国際センターから送られてきたテレビ放送の中で、取組電光掲示板の映像を見て、その欄外に幕内でただ一人欠場の「照ノ富士」の名が朱記されているのを見て特別に強い印象を感じました。師匠の伊勢ヶ浜親方(元横綱・旭富士)よると「糖尿病もまだ完治していないし、腰もひざも悪い。まずは体を治すことが先決だ。」と語っておられました。私自身には「照ノ富士はもう土俵に戻ってくることはできないのではないか。」と感じられたからです。しかし、千秋楽の琴桜と豊昇龍の力のこもった大関同士相星決戦を見るや、「そうか、照ノ富士が2人の大関に対して、ぜひとも自分の後継者になってほしいという念願をかけて、念入りに筋肉トレーニングの指導を行っていたのに違いない」と思うに至りました。

「相撲」から「角力」への流れの中にいる

…という私の思い込みの当否は別にして、学生相撲の時代から筋肉トレーニングに熱心で、ベンチプレス 220~230kg を挙げるといふ(照ノ富士と同じ伊勢ヶ浜部屋の)尊富士が新入幕初優勝を遂げたあたりから、筋肉トレーニングに力を入れる力士が多くなったような気がします。「相撲」は、「組み合ってあらそう」という意味の日本語の動詞「すもう／すまふ」に由来しているそうですが、最近では「相撲」ではなく、「力」を「角」(比べる)つまり「角力」が主流になってきているような感じが強くなります。思えば11月場所を通して、右四つないしは左四つによる「がっぷり四つ」の相撲が見られることはなく、相撲の勝負の鍵をになう差し手争いもどこかへ消え失せてしまったのでしょうか。千秋楽の土俵で、「相撲」巧者とされる元大関の霧島を、有無を言わず吊り出した豊昇龍の「角力」ぶりに大きな流れを見ることができました。

“力強さ”に満ちた 2025 年の角力界に期待

今回の九州場所で大関・豊昇龍に土をつけて 2 回目の殊勲賞受賞をした阿炎(東前頭三枚目)しかり、関脇時代に見せていた元気な取組を久方ぶりに見せて、最後まで優勝争いに絡んで 4 回目の敢闘賞に選ばれた隆の勝(東頭 6 枚目)もまたしかり。多分、筋力トレーニングによって鍛えた“筋肉”がもたらしてくれたものと思われる“力強さ”を発揮する力士が続出して、もともと角力取りであった大の里も出番を失われたことでしょう。新入幕初優勝を遂げた際に負った負傷もほぼ癒えた尊富士も幕内に戻ってきて 2 桁の勝ち星を得ました。ともに、筋力トレーニングという”新たな角力界の王道”に戻って、「2025 年の角力界」を一層盛り上げてくれるものと楽しみにしています。